

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0669 ◆◆◆

22/01/05

## 【 重要な「1月相場」、年明けから予断を許さない 】

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。皆様にとって、良い一年でありますように。

-----  
昨年ドル/円相場は、大雑把に言って「年初安の年末高」。誤解を恐れずに言えば、一年を通し「緩やかな右肩上がり」をたどった。――と言えるかもしれない。

そして、そんな流れを継ぎ、2022年のドル/円は年明け早々から堅調裡。4日には早くも昨年高値 115.52円を更新する展開をたどっていた。詳細は後述するように、最近の1月相場はやや荒っぽい変動をたどることも少なくないのだが、今年も御多分に漏れず、荒っぽい変動が期待されている。

### ◎1月に「年間の天底」つける確率は4割強、決して無視できず

以下では、恒例である経験則から見た1月相場、月間見通しについてレポートしてみたい。まずは、1月相場の戦績について、1990年以降昨年まで過去32年間を振り返った場合、勝率は14勝18敗となっている。

それほど大きく偏っているわけではないが、ひとつ興味深いのは比較的近年はドル安・円高が有利であるということか。実際、2014年以降でドル高・円安方向に動いたことは2016年と昨2021年しかなく、残りの6回はすべてドル安・円高に振れていた。足もとは116円台に乗せるなどドル高方向に振れているドル/円だが、今月のどこかで流れが変わる可能性を否定できないのかもしれない。

そんな1月相場には、特徴が幾つもあるのだが、なかでも興味深いものとなると、以下の3つだろう。ひとつずつ順を追って説明していく。

最初に取り上げるのは、「月間を通した値動きが両極端である」ことで、動く年はかなり激しい価格変動を記録するものの、逆に動かない年はピタリとベタ凧状態が続くことが少なくない。前者の「よく動く1月相場」については、年明け早々の3日に、いわゆる「フラッシュクラッシュ」と呼ばれるドルの暴落を演じた2019年が思い起こされる。事実、2019年の1月相場は変動幅5.90円で年間1位の変動を記録していた。また、その前年である2018年は変動幅5.10円でやはり同1位、2017年も変動幅6.52円で同1位――となっている。こちらも近年の1月相場は、やや「大相場が多い」と言えそうだ。

次に、一年12ヵ月を比べて見た場合、不思議なことにドル/円相場は「1月に一年の天底をつける」ケースが非常に多い。

実際、1990年以降昨年までの32年間で13回の「年間天底」を記録していた。確率にすると、4割強であり、実際に比較的喫緊の事例だけを取り上げても、2016年と2017年は1月に年間のドル最高値を示現しているほか、2013年と、2019年そして昨2021年は逆に1月安値が結局年間を通したドル最安値となっていた。もちろん、毎年必ず起こる事象ということではないが、今年についても一応注意しておきたい。

前述したように年明け早々の4日、ドルは昨年高値を上抜けてきたが、こののち月内に「年間高値を示現」――といった展開をたどる危険性もまったくないわけではなさそうだ。

最後3つ目の特徴は、「1月の月足陰陽と、年足陰陽が同じになる確率が高い」――ことになる。1月の月足が陽線であれば、その年一年間は年間を通してドル高・円安に振れる公算が高く、実際に年足も陽線引けとなる公算が大きい。

ちなみに、こちらについても1990年以降昨年まで過去32年間の戦績を調べてみると21勝11敗、約3回に2回は的中という結果となっている。飽くまで参考程度の要因ながら、頭の片隅に是非とも留めておいて損はない気がしないでもない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、

ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。  
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved



FX-newsletter